
中二病と俺

帝国皇帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中二病と俺

【Nコード】

N9922X

【作者名】

帝国皇帝

【あらすじ】

荒スジである。特に意味はありません…ごめんなさい（笑）

中二な彼女（前書き）

変な本のある本屋、『岸本書店』でいつも店番をする主人公は、中二病少女と出会い…。

中二な彼女

「あー、疲れたあ」

こう愚痴を言っても変わらないのは知っている。俺は、岸川書店の息子たる岸川港^{さしかわみなと}16歳。1ヶ月前に入学して高校は行ってるけどはつきり行って特に何も無い。

「港。早く本どけ！店開けるから。」

こう言うのは親父、岸川書店の店主岸川健夫だ。うちはこの通り本屋をやってるが：あまり繁盛してない。置いてあるのは出てくる時代でも間違えたかのような内容不明な革の分厚い本や、研究書、小説だの漫画だの雑誌だのは隅っこのほうに棚一つ申し訳程度しかない。

「ねえ、もう小説バンバン売らない？まったく意味不明な本あってもしょうもないじゃん。」

「馬鹿もんが。本に失礼だろうが！」

「って言っただってねー。」

親父は確かに頑固だ。だからここにある古い本が十何年も生き永らえているのである。だけでもこの商売にならない本をいつまでも置いている理由はあるらしい。けど何も言わない。と言うか覚えてないんだと思う。

「商売上がったりじゃ店閉めるしかないよ。」

「：うるさいわ。」

今度は頭を殴られた。まあ仕方ない。

俺はいつもの問答を終えた後、いつもどおりの坂道を駆け下り学校へ向かった。はつきり言って友達は無いに等しい。たまにノート見せてくれないかと尋ねられること以外席の隣人とも話したことは無い。頑張つてこの高校に入った方がいいが、特に何も面白いこともなく、店のレジ打ちのため部活にも入ってない。俺の家は大通りの坂道沿いにあるレンガ造りの本屋である。高校はこれまた坂を

下りてすぐの角を曲がった先にあるせいかかなり近い。ものの2・3分で着くと、二階の昇降口から3階へと上がる。クラスは1―4。三階のせいにか、桜の匂いが鼻をつく。いつものように窓際中ごろの自分の席に座り、チャイムを待つ。クラスは喧騒に包まれている。聞いても特もない話だ、聞く必要がない。中学時代、俺はほかの友達の家より少し遠かったため、高校は皆と離れてしまった。なんてことを思い出す。リア充だったあの頃は。チャイムが鳴り、みんな席に着く。まもなく教室のドアが開かれ担任が入ってきた。名前は…、三宅高次みやけたつぐだったか。あまり人の名前を覚えるのは得意ではない。

「起立、気をつけ…礼」

あれは確か学級委員の小池だ。下の名前……そんなのは知らない。

「おはよう、今日の授業に特に変更はない、みんなしっかりと授業を受けるように。」

それだけだ。この担任には教師特有のらしがない。時々この人は本当に教師なのかと疑いたくもなる。まあ、話の短いことに悪いことは無い。はて1時間目は何だったか……。あ、数学か。特に問題なし。と思って席に座り直そうとしたとき……

「ええー抜き打ちテスト!？」

一人の声で、
クラスの空気が春にもかかわらず凍りつく……。

「ええええええええええ」

そう、凍りつき、音を立て碎けた。抜き打ちか。流石抜き打ちだ。苦笑いをするしかない俺だった。

案の定テストは散々で、自分がこんなにも頭が悪いのかと呪い
 くなつた。まあ、どの道本屋を継ぐ俺にはあまり関係のない話だが
 ……転職するときに…と、珍しく親父がまともな事を言つたから行つ
 ているだけ。クラスの皆も散々だったらしく、どんよりしていた。
 一日の授業も終わり、鞆を持って教室を出る。階段を降り、昇降口
 を出て正門を出る。朝と同じ道を行き、店にもどる。相変わらずガ

ラガラ……。鞆を二階に置いてレジに入って入荷した本を少し読む。汚さず、跡を付けず、慎重に……。どれからどれだけ時間が過ぎたのか、文庫本の半分を読んでいると滅多に拝めない客の姿があった。まずうちの店は万引きはない。万引きしても意味ないものが手前にあるからだ。その客は奥の本棚まで行ってうろちよろしていた。そう、明らかに挙動不審。

「まさか、なあ……」

まあ、一応声を掛けてみよう……。だが何故だろう。全身が「こいつと関わるな!」と警報を鳴らしている。黒い長髪の後姿、ん?よく見ればこいつ……うちの学校の生……徒じゃないか?

「君……な、何してるの?」

「っ! あ、あなたはっ! っく……結社の追手か……」

「は?」

全くもって意味不明である? 結社? 追手? さっぱりだ……

「な、なんでもない!」

頬を赤らめる少女、ああ、こいつ中二病入ってるな。そして盛大に鞆で本棚の本をふっ飛ばしつつ走って店外へ……。しかしすぐ店内に戻ってきた。若干濡れて……。ん? と思って空を見遣ると土砂降っていた。あーこいつ帰れないのか。なんてことを考えて、仕方がないからタオルを持って声を掛けに行く。

「はい。災難だったな。」

「うぐ……。あなた誰なの? その制服……同じ学校っぽいけど……」

落ち着いたのか普通に喋る少女。黒い長髪に整った顔立ちの少女は、三笠木葉みかさのきはと言う。彼女は1―6だから全く関わりがなく、双方知らなかったのだ。ココじゃ狭いなと思って、一応うちはカフェと本屋を無理やり融合させているある程度広いカフェの方へ案内する。

「へえ……あなたのうちはカフェまでやってるの? じゃ、おいしいコーヒーでも貰おうかしら……。あ、もちろんブラックね。」

「はいはい、140円ね。」

「あら、高いのね。」

「一応豆は好い物だ。それでも高い言うなら…。」

「言うなら？」

挑戦的な視線を向けてくる。

「はあ…。いいよ、一杯だけおごるよ…。傘すら置いてないからな…ここ。」

「あら優しいのね。それとも女に甘いだけ？」

なんだこいつ…さっきから態度がガンガン変わってるぞ!?

「雨上がったら帰れよ。」

聞いてないという風にコーヒーを啜る。そう、とても幸せそうに。
はあ、あと二時間は上がらないだろうな…雨。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9922x/>

中二病と俺

2011年11月15日17時09分発行